

# 1983年のバイロイト音楽祭

——ニーベルンゲンの指環——

RICHARD-WAGNER-FESTSPIELE 1983

——Der Ring des Nibelungen——

伊 奈 和 子

ニュールンベルグで列車を乗りかえ、ペグニッツをすぎると、何となく胸さわぎの様なものを覚える。車中には明らかにバイロイト参りと見受けられる乗客が多い。そろそろ、遙か遠く、小高い緑の丘に、レンガ色のバイロイト祝典劇場が車窓から望まれるからだ。前回1980年に「さまよえるオランダ人」と「ローエングリン」を、そして「ニーベルンゲンの指環」は1978年以来。最初にバイロイト音楽祭に来たのは1963年、「ニュールンベルグの名歌手」と「パルシファル」。今年で丁度20年になるけれど、その間全部の楽劇をそれぞれ最低二度はみて

いるから、自分ながら矢張り好きなのだ。一と、過去のいろいろの演出、演奏に想いを寄せているうち、列車は小雨降るバイロイトに到着。7月24日午後。開幕の日である。

リヒャルト・ワーグナー没後 100年記念。第72回のバイロイト音楽祭は、その時刻、あいくの雷鳴まじりの夕立ちにもかかわらず、華やかに初日を迎えた。今回の初日は、「ニュールンベルグの名歌手」で開幕したものの、話題の中心は何といっても25日から四夜にわたる「ニーベルンゲンの指環」である。前回の1978年—80年ではピエール・ブーレーズの音楽総指揮、パトリス・シェロー演出、リカルド・ペドッチー舞台装置、ジャック・シュミット衣装の、いわばフランス組。それに代わって今回はイギリス組の新演出で、ゲオルク・ショルティの音楽総指揮、ペータ



バイロイト祝祭劇場—開幕前風景—



当日券をさがす人

ー・ホール（シェイクスピアの演出で高名）演出、ウィリアム・ダッドレイ装置・衣装の3人が中核となっている。

今回の新演出には誰しも深い興味を持っているけれど勿論自分もその1人で、私なりに少しでも以前よりよく知りたい、解りたいと思い、出発前に時間の許すかぎり、対訳を読み、レコードをききながら台本を追い、もともになるゲルマン神話等をかじり等して泥縄的準備をした。しかに何といっても四夜におよぶこの大楽劇を、すみずみまでというわけにはいかない。切角手に入れた切符、いくら長いからといって、途中で眠くなるようなこと

ではいかにも残念ではないか——。それにしても今年は例年以上に入場券の入手が困難で「ドイツ国内より外国から申込んだ方がいい」とまでいわれていて、客同士がお互いに「よく切符がとれましたね」があいさつ代りになる程だった。入場券の予約は前年10月に案内のパンフレットと申込用紙が送って来られ、第一、第二希望まで書き込むようになって居り、大体予約と同時に全部売切れる。7月下旬から8月末まで、その年によって演目が少し変わるけれど、いつも第1回、いわゆる初日の切符は特に入手がむづかしいといわれている。そんなわけで、日本人の客も例年よりずっと少なく、10人ほど見受けられただけ。最も高い席は、舞台からかぶりつき6列目までで180マルク（1984年から200マルク）約17,000円、最も安い天井桟敷で15マルク、約1,400円。

何とか当日券を（予約が早い為に、いくらかの返券があり、又不意の大切な客の為に用意されている席の、あまりの切符があることもある）と、タキシード姿の紳士、ドレスアップした淑女が「切符買いたし」のプラカードを胸にかざして、劇場周辺にたむろしている。そういう熱心で気の毒な人たちに、入場券を高く売りつける人が毎年出没するので、去年は警官が正装の客になりすまして現場を押さえた。けれど、ノドから手が出るほど欲しい券も証拠品としてあえなく警察に没収。それを見た、取り巻きのアプレ客は、ガッカリして一しきり騒いだとか。この音楽祭合唱団で長く活躍、「ローエン格林」では小姓役でソロソプラノを歌って居られるシュテークマン・ナツエさん（旧姓・花田夏枝）から聞いた話である。

さて、毎年初日は大勢の貴賓や有名人でにぎわうが、今年もゲンジャー外相はじめ、建設相、国会議長、パイロイト市長らの顔がずらり。なかでも最も人気の高かったのがベアグム・アガ・カーン夫人（インド・英国人）。永年この音楽祭の常連だったが、前回のフランス組演出の間だけは見えなかったそうで、群衆が大きな拍手で迎えていたのが印象的であった。貴賓

たちが通る通路にはロープが張られ、一目見ようと街の人たちがぎっしり押し寄せる。こうして、祝祭劇場を囲む大庭園は一年中で最もにぎわいを見せ、華やかな大舞台の幕あきを告げる前奏曲の役割を果たすのである。

しかし着飾った人たちが集まるからといって、音楽祭を社交界視するのは軽率であろう。永年パイロイト通いをしている人が殊んどであるし、それぞれワグナーファンを自認している人達なのだ。

四夜にわたる長大な「ニーベルンゲンの指環」は、ワーグナーが北欧の古代伝説、ゲルマン神話、ドイツ中世の英雄叙事詩等の研究をもとに、詩や台本、音楽を整え、さらに理想的な特別の劇場をこのパイロイトの地に建築し、上演を完成させた。つまりワーグナーの偉大な遺産である。それは単に遺産にとどまらず、どのように現代に受け継がれていくかが人々の関心の的なのである。だから幕があき、最初の興奮が静まり、そしてやがて休憩になると、野外ロビーのあちこちで口角泡を飛ばさんばかりの賛否の論議が渦巻くのである。

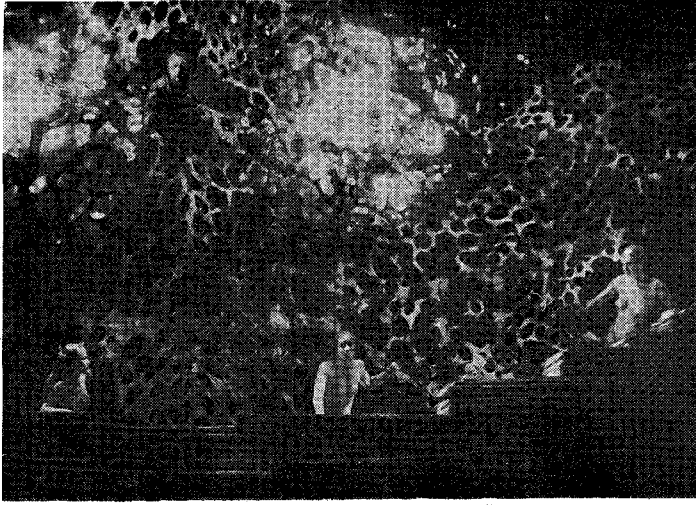
パイロイト祝祭劇場は、1876年に最少限の苦しい建築費で完成された、華麗なところの少しもない劇場である。客席は約2,000。左右から出入りするのみで中央に通路はない。ごく一部の貴賓席を除けば、椅子は全部板張りなので、長時間座っているにはいささか苦痛を感じる。その為、座布団（2つ折りにして手さげのように持参出来るのをパイロイト市内のデパートで売っている）を持って来る人もある。勿論冷房設備はない。今年のヨーロッパの夏は、何十年ぶりの暑さで、開幕前の劇場内は、満員の観客のいきれと通風の悪さで、苦痛を覚える程。キャスト表のパンフレットを扇代わりにあおぐだけでは追いつかず、正装の紳士も上着を脱ぎ、淑女も客席の暗くなるのを待ちかまえるようにロングドレスの裾をそっとたくしあげるありさまだった。

やがて劇場が真っ暗になり客席が静まり返ると、舞台の下のオーケストラ・ボックスから、ショルティ指揮の管弦楽が、少し遅いめのテンポで流れ始めた。（ワーグナーは、巨大な管弦楽に伴奏された歌手の、テキスト内容が不明瞭になるのをふせぐため、オーケストラ全部を舞台の前でなく、下へ沈め、なおそれに二重のおおいをつけた。それゆえに非常に音がやわらかくなる。）

いよいよ第一夜「ラインの黄金」の開幕。一ワグナーファンとして、印象に残った場面を拾って記述してみると――。

### 第一夜「ラインの黄金」

序曲のあと幕があくと、アッと驚きの声をあげたくなる程の装置。舞台にしつらえた大きな水槽の（水深約40センチ余り）中で3人のラインの乙女たちが、一糸まとわぬ裸の姿で泳ぎながら歌う。その姿が、水平線から45度の角度で傾斜させた大きな鏡に映る。客席から鏡を通して水槽を真上からみることになるが、それが丁度舞台一杯上まで水があり、乙女たちが本当に河のなかで泳いでいるように見える。時々バシャバシャと水の音等も聞え、グリーンがかった照明と共に実に美しい舞台で瞬時暑さを忘れさせた。



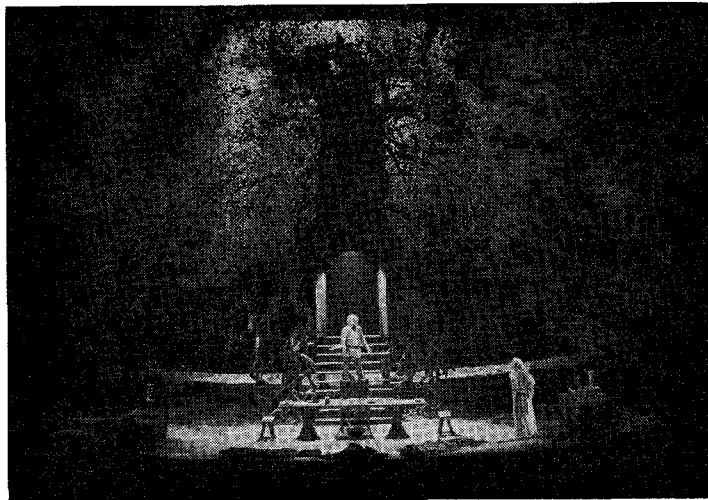
ライオンの黄金第一幕

が跳びはねる仕掛けになっていて、舞台をピョンピョンとはね回るので、客席から笑いのどよめきが起った。ここでも、舞台から多くの洞察力を要求されるシェローの場合と全く反対で、大人のお伽話を見せてくれる。

第三、四場では舞台はかなり抽象化され、神々が虹のきざしを昇って天上の城に帰る場面では又メルヘン的な演出に戻るといったふうで、抽象と具象が混在していた。

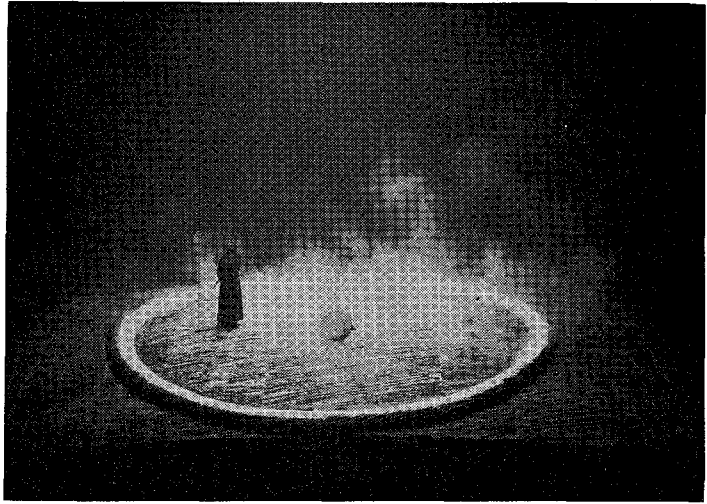
### 第二夜「ワルキューレ」

「ライオンの黄金」での抽象・具象の混在はここでも顕著。第一幕、騎士フンディングの家の場面は、中央にトネリコの大木が見事な葉を茂らせ、フンディングは食事で実際にパンをひきちぎってスープに入れるという芸の細かさ。だが第二、三幕の岩山では抽象化、といった具合である。そして最後の幕切れ、燃えさかる炎に囲まれてブリュンヒルデが眠る岩山の場面は、空飛ぶ円盤のように最後に上へ昇って行くので驚いてしまった。この幕切れの場面は、いつも最も美しい舞台と音楽を期待するところである。前回のシェロー演出、さらに前々回のホルスト・シュタイン、ウォルフガング・ワ



ワルキューレ第一幕

一グナー組の舞台は、真っ赤な炎で劇場まで燃えるのではないかと思われたほどの演出・装置で、音楽も極めて感動的だった。その印象が強く胸に残っていたので、今回のように炎が消えて円盤が上に昇り、管弦楽も弦が少々はつきりし過ぎ、鉄琴、トライアングル、ピッコロが薄れ、美しい旋律に酔えなかったのは大



ワルキューレ 第三幕

いに慾求不満だった。閉幕後客席からかなりブービーを飛ばして不満をぶつけていたのもうなずけた。

### 第三夜「ジークフリート」

一日休みを置いた第三夜。第一、二幕は極めて具象的で、ことに二幕の大蛇はまるで怪獣だ。ジークフリートが鍛冶の達者なこびとのミーメを殺して池に投げ込み、水のなかを引きず



ジークフリート 第2幕

り引き揚げる（進行上の必要からか）ところでは、ジークフリート役のマンフレッド・エンクリよミーメ役のペーター・ハーゲのほうが体が大きいこともあってなかなかうまくいかない。客席の前の方で、「ドッコイショ」とか何とか声をかけたりして騒いでいる人もあった。

第三幕では、また抽象化された岩山、円盤が現われる。

### 第四夜「神々の黄昏」

やはり一日置いて8月30日。最後で、又四夜のうち最も長い日である。16時開演、終演は22時50分。（「ラインの黄金」は開演18時、終演20時30分で休憩なし。それ以外は幕間の休憩が1時間前後ある。）

私の受けた印象では、結局第四夜「神々の



神々のたそがれ第3幕

黄昏」が最もまとまっていたように思われた。とくに序幕後半のジークフリートとブリュンヒルデの愛、第一幕三場のブリュンヒルデの受難の場面は、装置、照明とも現代的なナイーブな美しさを表現していたように感じられた。又最終幕切れのラインの洪水、ワルハラ

の城が炎上するところは炎があかあかとなり、最後らしい盛りあがり成巧していたようにみられた。この幕切れの為に故意に「ワルキューレ」の幕切れをあの様にしたのかも知れないと思った。

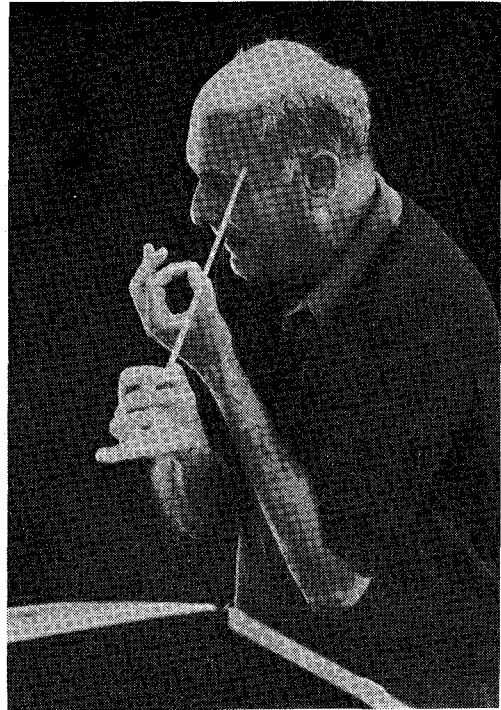
休日をはさんで延べ6日間という「ニーベルングの指環」は、聴くだけでも大変な労力がある。終ってやれやれ、というのが本音である。シェロー演出は、前にも少し触れたけれど、政治色が強く抽象的で、考えさせられる舞台であった。併し、今回はしっかりと紙芝居的で、歌手の演技はあまり細かいといえず、大人のおとぎ話をみせてくれた。全く私の個人的好みから云わしてもらうなら、「どっちもどっち」であり、かえって前々回のヴォルフガング・ワーグナーの凡庸だといわれた演出のほうがまだよかったと思う。「すべての偉大な芸術は単純である」とフルトヴェングラーがくりかえし云っているのを、思い出した。(この際平凡と単純を同一にしているのではない。)これから向う3、4年、ショルティ、ホール組のリンク、がつづくわけで、ショルティ自身、記者会見で述べている——「自分達はワーグナーの台本に出来るだけ忠実に、ロマン的なものにしたと思っているが、まだまだ未完成である」と。

ヴォルフガング・ワーグナーが最初に「ニーベルングの指環」を演出した時、ゲネプロに、全く素人のパイロイト近郊の農家の婦人を招待してみせ、思う存分意見を述べてもらったところ、多々重要で参考になる点を得る事が出来た——、この話は永年パイロイトで総指揮の助手をつとめてこられた指揮者・飯守泰次郎さんから伺った話である。

とにかくこれだけのものをあらゆる点で、すべての観客に満足を与えることは永久に不可能と思われる。純音楽でないだけにその点ますますむつかしいのであろうか。演出は、永年パイロイト通いをしている人が多いだけに特に最も手厳しい批判を受けるのである。

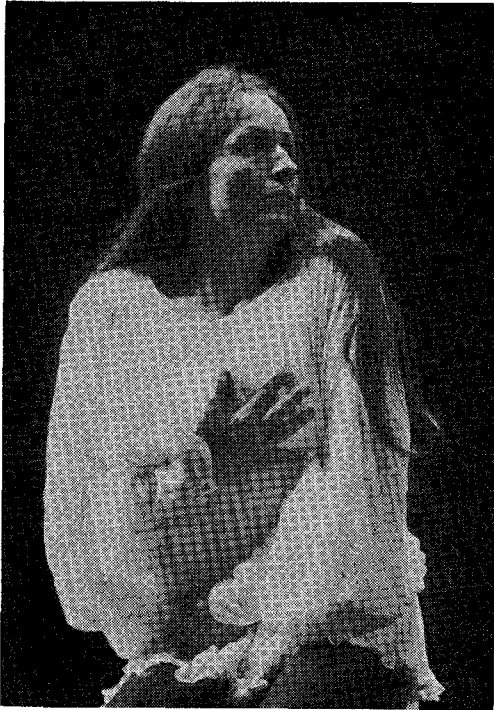
さて、オーケストラの演奏は、ショルティがなぜか、オーケストラの二重のおおいの一つを

取りはずして演奏。「神々の黄昏」のみ、もとにもどした。そんなわけか、生々しい音が少々気になり、歌手とのバランスもあまりよいとは思えなかった。「ワルキューレ」のチェロのソロは実に見事で美しかったのに反して「神々の黄昏」三幕、ホルンのソロのジークフリートのテーマはひどいミスで、客席が騒がしくなった程。オーケストラとコーラスは各地から選り抜きの優秀メンバーであるが前回ブレーズの場合も初回特にうまくいかず、バイオリンの眞峰紀一郎さん——ベルリンオペラのオーケストラ所属——など「ブレーズでは自分は弾かぬ」と長く拒みつづけてきた。今回ショルティの場合も、まだ何となくしっくりしなくて、速いところと遅いところの差がありすぎたりという感じを受けた。



ゲオルク・ショルティ

ここで歌手について、一云ふれておかねばならない。ショルティは今回、若い人達を起用するのが一つの希望であったときいた。最もよかったのがブリュンヒルデ役のヒルデガルト・ベーレンス。カラヤンお気に入りの歌手だけあって細かい云葉のニュアンス等、歌唱表現力は抜群。ただブリュンヒルデ役としては少し声の質が細く感じられた。次に、ジークリンデ役のジャンニーネ・アルトマイヤーは声量も豊かな美しい声でなかなか人気があったが少々声に溺れて捧うたいの感がないでもなかった。ヴォータン役のジークムント・ニムスゲルンは「ラインの黄金」、「ワルキューレ」では役柄上もう少し重みが愆しい感じがあった。「ジークフリート」では体調が悪いと休み、ベント・ノルプが代演したけれど、この人も少々細い声（ヴォータンとしては）で、一寸でくの棒といった感じ。アルペリヒ役のヘルマン・ベヒトは男性中では最もよかったのではないか。歌も芝居も大いに満足させてくれた。ミーメ役のペーター・ハーゲも最初のうち、もう少しミーメ役としてのずるさ、いやらしさが声に出てもいいと思ったけれど、さほど気になる程の事もなくなったので、まあ満足しなければなるまい。フンディング役のマチアス・ヘーレは声量たっぷり立派。ジークムント役のジークフリート・イェルサレムは、声も歌唱力もなかなかよかった。エルダ役のアン・ジェヴァンク、ワルトラウテ役のブリギッテ・ファスペンダーはそれぞれ好演。グートルーネ役のジョセフィーヌ・バーストウは一寸異質で、ワーグナーには向いていないと思う。最も大切な役の一つであるジークフリートはマンフレッド・ユンク。今回、彼は全く大変であった。前回シェロー演出の際、「神々の黄昏」



ブリュンヒルデ役のヒルデガルト・ペーレンス

のジークフリート役を歌ったのだが（「ジークフリート」に於けるジークフリート役はルネ・コロが予定されていた）今回「ジークフリート」のジークフリート役はライナー・ゴールドベルクが予定されていたのに、不調というか、どうしても出来ず、とうとう初日の4日前になってユンクが歌うことになった。彼は「ラインの黄金」ではローゲの役も歌っていたので、四夜のうち「ワルキューレ」以外は全部歌うことになったのである。声の質が少々細く甘い為、不死身の野生的な感じがなく、特に「ジークフリート」に於いては急な事もあってか、心もとない結果となった。しかし、「神々の黄昏」では、前述の如くオーケストラのおおいももとの二重にもどされ、前回の実績の上につみ重ねた力量の様なものを感じさせ、どうにかもちこたえたといった

感じ。一夜だけならともかくとして、これだけ歌い通すことは、役が役だけに全く大変なこと。ワグナー歌手の生命は短かいと云われているが並大抵の事ではないと、つくづく感じたものだった。

ゲネプロでの演出が本番で変更されることも常で、第一回目の公演と二回目、三回目、更に、翌年には又変わる。

音楽祭についての客の評価は「いまとなってシェローの演出のよさがわかった」と嘆く人、「もうバイロイトにワグナーはないと云われていたが、やっとワグナーが帰ってきた」と喜ぶ人など、まちまちである。そんな人達が8月26日音楽祭が終るまで、延べ53,000人もバイロイトに参集する。ワグナーはそれ程不思議な魅力を持ち続けている。

ドイツ音楽を勉強している自分にとって、一度はバイロイト音楽祭をみなければ、と足を運んだのがやみつき。いったんワグナーに魅せられた魂は、まるで麻薬にとりつかれたように、最初は少量で酔い、次第に多くを要求しはじめ、バイロイトに通うことになる。今後どの様になって上演されるか、又来年も「指環」を聴きにくることになるだろう、と、帰途、満天の星を仰ぎつつ思ったことだった。

おわり

記、これは、8月13、15、22日の3回にわたって、毎日新聞に掲載されたものに加筆したものである。

尚、舞台写真はバイロイト音楽祭報道用写真である。